

第2章 銃後

子どもたちの生活①

はらいつぱいお米を食べたいな

なかむらたけこ
中村竹子さんのお話から

○糧秣 軍隊で、兵と馬との糧食。兵糧とまぐさ。

○防空壕 航空機による空からの攻撃から身を守るためにつくった穴や地下室。

○配給制 米や味噌、砂糖等の食べ物などの物資を、生活の必要に応じ、平等に割り当てて配る制度。札幌市では昭和十五年（一九四〇年）四月に児童のゴム靴に切符制が導入され、六月に米、砂糖などに広まった。

私は昭和十一年（一九三六年）に苗穂駅の近くで生まれ、現在の苗穂小学校に通っていました。苗穂駅から歩いて十五分ぐらいのところに自衛隊苗穂駐屯地があります。元は陸軍糧秣廠といって、兵隊さんにいろいろな物資を送るところだったのです。そこで、私の父と母が働いていました。

私が小学校に上がる二年前に、太平洋戦争が始まりました。戦争中は、敵が来たら空襲警報のサイレンが鳴り響きます。私たちが住んでいたところには六十軒ほどの住宅があり、サイレンが鳴ると、家にいた人は、布団をかぶったり、防空壕に入ったりします。

防空壕というのは、今でいう地下室のようなものです。上に草を植えて、空から見たら野原のように見えるようにしてつくられてありました。「空襲だ！」と叫ぶ声が聞こえると、そこに入りました。夜でしたら、街灯はもちろん、町の電気が全部消えてしまいます。家の中も、電球に黒い風呂敷を掛けて、明かりが外に漏れないようにしていました。防空壕に避難したときは、母に「しっ、しっ、しゃべったらいけないよ、外に聞こえるから。」と言われました。今思えば、空襲は空から来るのですから、話し声などが聞こえるはずがないのですが、じつと静かにしていました。

そのころは、お米が配給制でした。戦争中は、一升ます、五合ますなどがあって、「あなたのところは何人家族だから一升ですよ。」と言われて、袋を持って行って、並んでお米をもらってくるのです。配給のお米だけでは足りないのです、お父さんやお母さん方はみんなお米が

○物々交換 物や貨幣などの媒介物に頼らず、直接他の物と交換すること。

○ねんねこ ねんねこば
 なんてん略。ねんねこば
 なんてんとは、子どもを背
 負うときに着る、綿入れ
 のはんでん。

欲しいと田舎に買い出しに行きます。もちろん、お米だけではなく、麦や野菜もです。麦にお米を少し入れて麦ご飯にします。お母さんの着物などを農家に持っていき、お米と交換するのですが、「この着物だったらお米何升だよ。」と言われて、お金の代わりにお米と物々交換をしていくのです。

苗穂駅のすぐそばに交番があって、汽車が着くとお巡りさんが出てきて、お父さん方の背負っているリュックサックを「ぼん、ぼん」とたたくのです。そして、お米だったら、そのまま交番に引っ張られ、そのお米をみんな没収されるのです。私の母は、お米を赤ちゃんに見せかけていました。袋を縦にして、お帽子をかぶせ、おんぶをして、ねんねこを着せて、私の手を引いて駅のホームから出てくるのです。

そうしたらお巡りさんは、子ども連れだからということで大目に見てくれたのでしよう。私の母は一度も捕まったことがありませんでした。でも、私は、そこを通るときは、前のおじさん方がみんな捕まっているので、ドキドキしておっかない思いで母の手をしっかりと握って出てきた覚えがあります。

汽車が苗穂駅の近くになると、窓からお米を放り投げる人もいました。その人の家族が汽車の通過する時間を調べていて線路



イメージ図

お米を赤ちゃんに見せかけて運んでいた

はらいっぱいお米を食べたいな

○防空頭巾 空襲などの
ときに飛んでくる物や落
ちてくる物から頭部を保
護するために頭にかぶつ
た綿入りの頭巾。

の脇わきに隠かくれています。汽車が通過つうかしていったら、お米を取って帰るのです。それで、駅に降りたときは、お父さん方は身軽まわりですから、お巡りさんに捕つかまることもないのです。そういう知恵ちえも働かせながら、どこの親も子どもたちにも少しでも多くのご飯を食べさせ、ひもじい思いをさせないようにどの気持ちでいたのです。

買ってきたお米は玄米げんまいですので、一升瓶いっしょうびんにお米を入れて、竹のぼっこで突つつくのです。何回も何回も突つついていっていると、ぬかが取れて白米になるのです。それは子どもの仕事で、私もよくやらされましたが、白米にするのはなかなか大変なのです。水くみも私たち子どももの仕事でした。お米を食べるために、いろいろな苦勞くろうがありました。

普段ふだんは白米ではなく、麦むぎご飯を食べます。麦が七割わりでお米が三割わりです。ジャガイモのふかしたものやカボチャの塩煮しほを代用食にしたこともありました。そして、麦むぎご飯におみそ汁しる、おかずが一品か二品です。魚があれば最高のごちそうでした。お肉なんか食べたことはあまりありませんし、おやつなどは全くありませんでした。

学校に通うときには、防空頭巾ぼうくうずきんという綿わたの入った帽子ぼうしを必ず下げて行っていました。通学とちゅうの途中とちゅうでサイレンが鳴なったら近くの家の壁かべに



イメージ図

DDT を背中からまかれる様子

○もんぺ 袴はかまの形をして足首あしむねのくくれている、股もも引ひきに似た衣服。保温用ほおんまたは労働用。

○かつぼう着 料理や家事の際さいに着物の上うへに着るうわっぱり。

○ゲートル 厚地あつじの木綿めん・麻あさ・ラシャ・革製くわせいです。ねを包む服装品ふくそう。外側ひもを紐ひもで編あみ上げる物と巻き付ける物とがある。

○寄生 生物が栄養の大部分たぶんや暮らし場所をほかの生物体せいぶつたいに一方的いっぺんに依存いぞんして生活すること。

くつついたり、大きな木の下に避難ひなんしたり、急いで家に帰ったり、学校に行ったりしました。そのころのお母さんたちは「もんぺ」をはいて、かつぼう着を着ていました。お母さんたちも、有事そなに備えて婦人会ふじんで竹やりを持って「えいっ！えいっ！」と訓練をしていました。お父さんは「ゲートル」を巻まいて、勤つとめに出ていました。火災かさいに備えてバケツで火消しのリレーも練習れんしゅうしました。

そのころは、シラミという昆虫こんちゅうが大量に発生してしまいました。シラミは小さな虫ですが、人に寄生きせいして血を吸すって生きています。ある時、一列ならに並んで校長先生のお話を聞いていると、前に立っている女の子の頭にシラミがいたのです。払はらおうとしたら、先生に「こらあ！」と怒おこられますので、黙だまって前の女の子の頭を見えていました。

これは戦後のことになりましたが、一週間に一遍いっぺん、全校そろってDDTデーデーデーを体全体たいぜんたいにかけられました。DDTデーデーデーはシラミを殺す粉の薬です。背中せなかから「シャツ、シャツ」とDDTデーデーデーをまかれます。女の子は頭にもまかれます。男の子は坊主頭ぼうずあたまですので頭かぶにかけられることはありませんでした。

今、みなさんはとても幸せだと思います。ゲームはある、テレビはある、パソコンはある、インターネットはある。ぜいたくな生活で、本当に今の日本が一番幸せな時代ではないかと思っています。

みなさんは幸せに暮くらしていることに感謝かんしゃをしなければなりません。私が小さいころの父や母はとても苦勞くろうして子どもたちを育ててくれました。今の世の中に感謝かんしゃして、お父さん、お母さんに感謝かんしゃして、大きく成長してください。

DATA

平成21年度白石区平和事業

聴き取り

- ・平成21年7月30日
- ・白石区役所



中村竹子(なかむら・たけこ)さん

- ・昭和11年(1936年)生まれ
- ・札幌市白石区在住

はらいっぱいお米を食べたいな